

初代藩主水野勝成入封400年記念

福山名所コンサート

ふくやま などころ



第4回 備後一宮吉備津神社

2019年4月6日(土) 10:30~12:00

会場: 備後一宮吉備津神社参集殿 福山市新市町宮内400

お話「備後一宮 吉備津神社のうつりかわり」

尾多賀 晴悟 (備後一宮吉備津神社禰宜)

能と胡弓と三味線のコンサート

大島 政允 (能楽シテ方 喜多流)

大島 衣恵 (能楽シテ方 喜多流)

久田陽春子 (能楽小鼓方 大倉流)

木場 大輔 (胡弓演奏家)

杵屋 浩基 (長唄三味線方)

- ・「桜 川」 謡と舞と小鼓
- ・「福 山」 小鼓にあわせて謡ってみよう
- ・「八 島」 謡と舞と小鼓
- ・「二上り」 胡弓と三味線
- ・富山県民謡「越中おわら節」 胡弓
- ・名古屋系胡弓本曲「鶴の巣籠」 胡弓
- ・中能島欣一作曲 三絃独奏曲「盤渉調」 三味線
- ・長唄「昔嘶 狸」より腹鼓の合方 三味線

主催/喜多流大島能楽堂 Tel 084-923-2633 <http://www.noh-oshima.com>

共催/福山城築城400年記念事業実行委員会

後援/福山文化連盟 福山喜多会 エムエムふくやま

備後一宮 吉備津神社のうつりかわり

◆はじめに

水野勝成公（以下、勝成公）が備後に入封され、今年が四〇〇年に成ることから、福山市各地で勝成公とご縁のある場所で催しが行われています。備後一宮 吉備津神社と勝成公とのご縁は、中世の戦乱期において、荒廃した境内を、現在のように再建して頂いたことです。勝成公がお亡くなりになる二年前に本殿が完成し、その後、水野家及び福山藩により境内の建造物が見事に再建されました。今回は、勝成公再建以前と、その後の神社の様子を絵図資料を遣って解説します。

◆備後一宮 吉備津神社とは

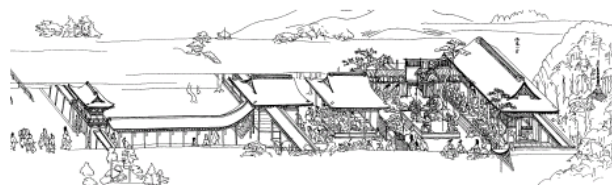
備後一宮 吉備津神社（以下、備後吉備津神社）は、大同元（八〇六）年、備後国品治郡の宮内の地に、備中一宮 吉備津神社から分祀され創建されました。もともと備後は吉備の国の一部で、「大化の改新」（六四五年）以降、備前・備中・備後と分割され、備前と備中は「吉備の中山」を境に分国され、備後は「吉備の中山」より約四十キロ西方に国境（現在の井原市と福山市神辺町の境界線）を設定されました。こうして巨大な吉備は三国に分割され、特に備後は安芸や出雲の接点として、備後国府（現在の府中市元町付近）を中心として、大和政権の支配をうけることになりました。『勘合略記』

備後吉備津神社には幸いなことに、江戸時代以前の当時の神社の様子を伝えてくれる、三つの時代の絵図が残っています。一番古いものは、弘安一〇（一二八七）年の鎌倉時代の様子を描いた絵巻物で、『一遍聖絵』とよばれるもので、遊行寺（神奈川県藤沢市）が所有し、国宝に指定されています。つづいて、室町時代の境内の様子が描かれた『吉備津神社古図』。江戸期のものとして、安永二（一七七三）年に奉納された『備後一宮境内図絵馬』と同時代の『備後国一宮社の図』の版画が現存することから、各時代ごとの境内および周辺地域の変遷を知ることができます。

◆一遍聖絵（遊行寺蔵）部分〈写真〉



◆一遍聖絵（遊行寺蔵）部分 〈三浦正幸氏トレース〉

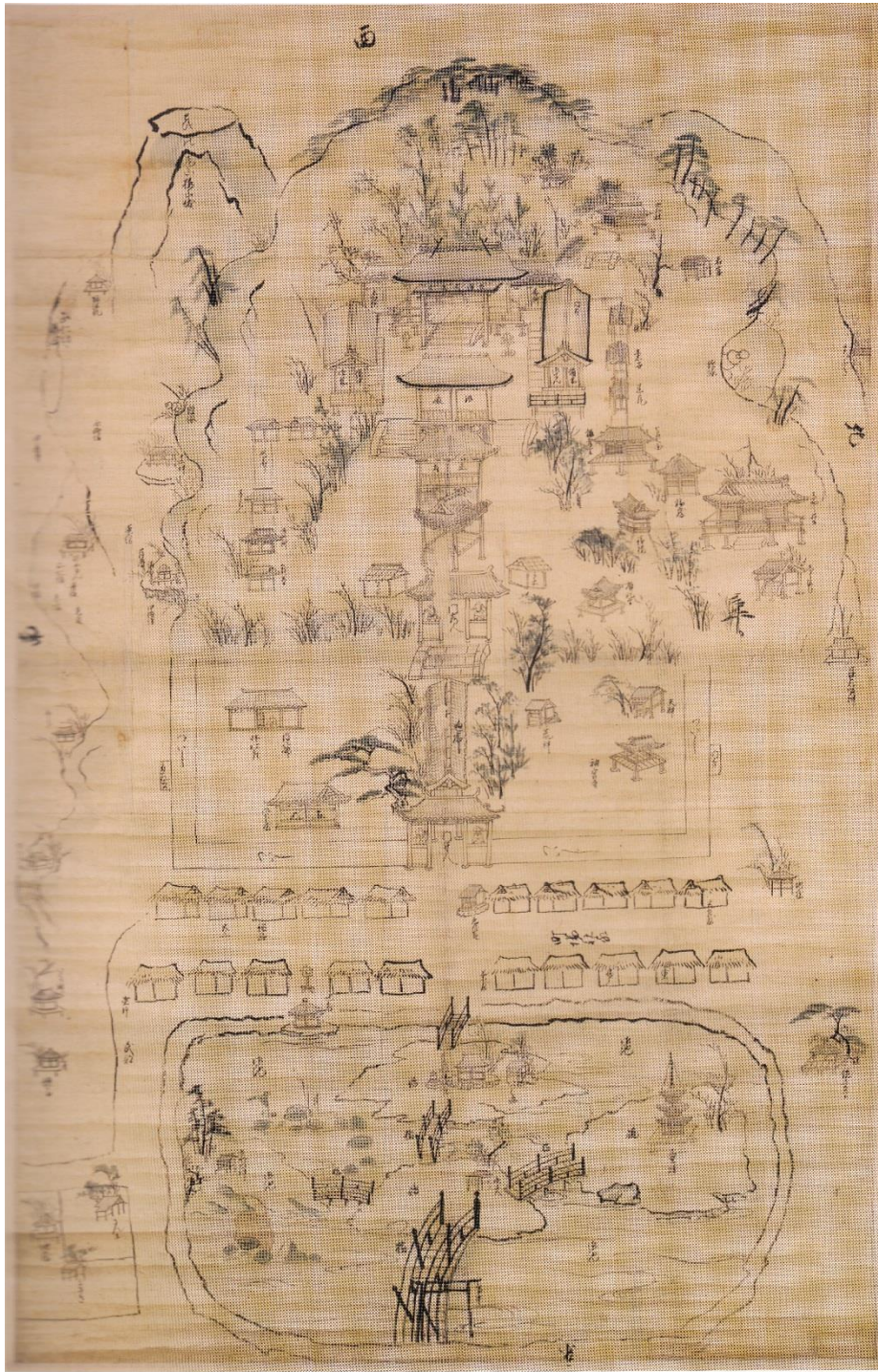


絵伝 卷十・第二段には、時宗の開祖「一遍」が、全国遊行中に弘安十（一二八七）年備後一宮を参拝した場面です。本殿の大床正面に一遍が座り、「秦皇破陣楽」という秦の始皇帝ゆかりの舞楽を聖人の供養のために奏せられた情景が描かれています。

絵伝には、本殿を挟んで相對する二間三間の二棟の社殿が描かれている所に、現在でも礎石が存在し、旧社殿地として建造物を建てることをひかえるよう伝承されています。また、本殿裏山に描かれている多宝塔の位置から実際に平安時代末から鎌倉時代にかけての土器とともに建物の部材が大量に出土している（備後吉備津神社本殿裏山遺跡）ことなどから、この絵図の正確さが証明されます。

そして、この絵図から当時の備後吉備津神社の広大な伽藍（建物配置）が想像され、現在の建物が鎌倉時代の建物を踏襲し配置されていることがわかります。

◆備後吉備津神社古図（紙本淡彩）〈全体〉



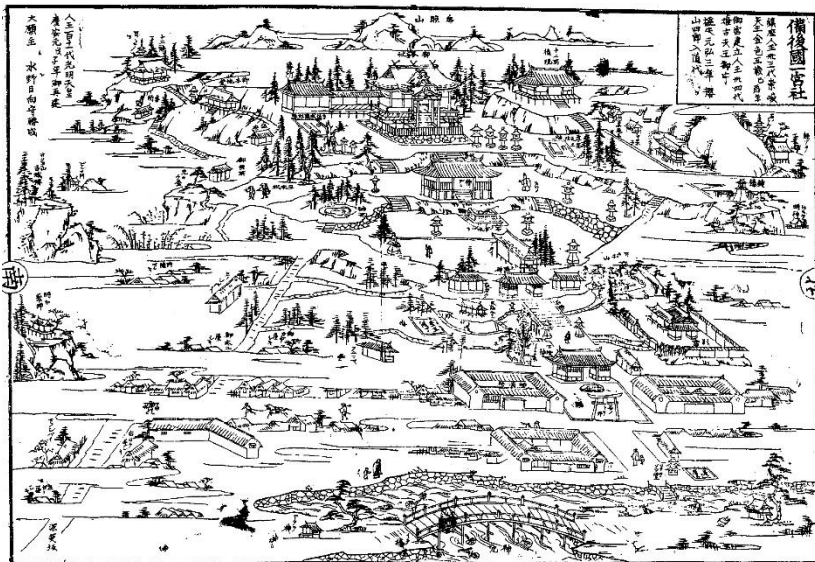
また備後吉備津神社には、室町時代ごろの神社の様子を江戸時代の初めに描いたものといわれている絵図が、全部で三幅現存しています。三幅とも、境内全体が描かれており、下方に御池、次に町場・社家、その上に虎睡山を背にした社殿や堂が描かれています。室町期においても、本殿を挟んで相対する二間三間の二棟の社殿（御殿）が描かれており、現在その地は、旧社殿地として礎石が残存しています。

◆備後一宮境内図絵馬（木製） 備後吉備津神社蔵



この絵図は、江戸時代中期の安永二（一七七三）年に奉納された、絵馬に描かれた備後吉備津神社の当時の様子です。その範囲は、東西四五〇メートル・南北五〇〇メートルで、制作当時の境内の地形および社殿配置を正確に描いています。社殿は山麓の東斜面に一直線に配置され、参道の右手（現在の桜山神社）には神宮寺が見えます。この絵図は、現在の様子と重ねることが出来ます。

◆備後国一宮社の図（版画）『黄葉夕陽文庫』 広島県立歴史博物館蔵



この版画は、江戸時代後期に活躍した神辺在住の菅茶山の収集した『黄葉夕陽文庫』の中に発見されたものです。『備後一宮境内図絵馬（木製）』と内容がほぼ同じことから、同時代のものと考えられます。ただし、こちらの絵図には、随所に名称の説明があり、状況がより刻銘に知ることができます。この時点では、三殿あった社殿（御殿）は中央に一殿とされ、旧社地は明記されています。

よって、現在旧社殿地に残存する礎石群は、平安時代から室町時代の社殿（御殿）の礎石の可能性が高く、社伝によっても、この地を開発することを禁じていることから、いくつかは当時の位置も動いていない可能性が高いと考えられます。今後、測量調査や発掘調査などの、総合的な学術調査を期待するものであります。